

校長通信

Morifun

<2021年スタート>

新しい年が始まりました。改めて今年もよろしく願います。新しい年を迎えるとなんか心がウキウキするものですが、今年は今まで経験したことのないコロナ禍の年明けとなりました。1月8日には1都3県に緊急事態宣言が発出、その6日後にはさらに7県が追加となり、県によっては独自の宣言を出している所もあります。先行きが見えない状況に不安を感じています。そんな中16、17日にはセンター試験の後を継ぐ大学入学共通テストが実施され、本校からも33人が受験しました。来月からは私大の入試が本格化し、約1ヶ月後には国公立の前期入試があります。いよいよここから勝負です、受験する皆さんにエールを送ります。そして今年度も残りわずかとなりました。3年生にとっては実質ひと月足らずの高校生活となります。悔いのない日々を送ってほしいと思います。もちろん感染対策はしっかりやりましょう！

<クリスマス礼拝>

12月23日にクリスマス礼拝が行われました。新型コロナウイルス対策のため、賛美歌は音楽部に聖歌隊として歌ってもらい、聖書朗読そして盛岡教会の潮田祐牧師による説教があり、キャンドルサービスでイエス・キリストの誕生を祝いました。潮田牧師は「私のクリスマス」

と題して、クリスマスプレゼントの根拠である「マタイによる福音書第2章1～12節」での、占星術の学者らがキリストの誕生に感謝してささげた黄金、乳香、没薬の贈り物であること。そして感謝することの大切さを説き、「受けるより与える方が幸いである」という言葉が贈られました。



<始業礼拝より>

新約聖書 マタイによる福音書 第1章 22～23節
このすべてのことが起こったのは、主が預言者を通して言われていたことが実現するためであった。

「見よ、おとめが身ごもって男の子を産む。その名はインマヌエルと呼ばれる。」

この名は、「神は我々と共におられる」という意味である。

報道されているように、新型コロナウイルス感染症の拡大に伴って、緊急事態宣言が一部の地域に出されています。皆さんも不安に感じていると思われるが、一人一人が健康で生活が守られることをお祈りします。

昨年は新型コロナウイルスの影響で本当に大変な一年となりました。私たちにとって先が見えないというのは、本当につらい大変な状況です。健康の不安もそうですが、この先どうなっていくのだろう、どうしたら解決するのだろう、不安な状況が続きます。この先が見えない、答えが出ないという時に、改めて心に響いた聖書の言葉として、「インマヌエル」があります。これはヘブライ語で「神が私たちと共にいる」という意味です。今日読んだこの言葉はちょうどクリスマスの時期に読まれることが多いのですが、「インマヌエル」というのがイエス・キリストのもう一つの名前です。イエス・キリストがこの世界に来たのは、「神様がいつも我々と共にいる」ためだというメッセージです。

なぜこの「インマヌエル」が心に響いたかということ、先が見えない時はどんどん不安になります。でもそんな時誰かがそばにいてくれたら勇気が出るというのが改めて思ったことです。たとえ心の中で苦しい、不安な思いがあっても、誰かとそれを分かち合う、苦しさを誰かと分け合うことができれば、ちょっと心が軽くなる。振り返ると、自分が一人きり、一人ぼっちで誰もそばにいないと感じる時、孤立してしまう時、誰かがそばにいる大切さを感じるようになります。聖書は「神様がいつも我々と共にいる」ということを伝えてくれています。

皆さんそれぞれ今悩んでいることとか、自分の課題とかを抱えていると思いますが、なかなかすぐに答えは出ないと思います。自分も高校生の時にはいろんなことに悩みましたが、本当にゆっくりと時間をかけて自分なりの答えというのを見つけていって、今もその途中にいます。高校生の皆さんが自分のやりたいこと、自分の課題がすぐに見つかるということはないと思いますが、そういう中で大切にしたいと思うのは、大事な誰かがそばにいてくれるということ、それが自分に勇気を与えてくれます。

聖書の中には、「光は暗闇の中で輝いている」という言葉があります。ときに自分の回りは暗闇が囲んでいる、目の前が暗いときに、暗闇の中で目を凝らせば光がちゃんとある、ということ伝えてくれています。それは目を凝らせば、大切な誰かが必ず自分のそばにいてくれる、目には見えないけれど、神が共にいてくれる、共に歩んでくれるということです。

(1月15日 始業礼拝 花巻教会牧師 鈴木先生)



< 始業式講話より >

1月5日の朝日新聞に、「心に刺さって離れないことば、あなたにありますか？ 中学生、高校生に呼びかけた私の折々のことばコンテスト2020」の優秀作品の特集記事が出ていました。今日はその最優秀作品を紹介します。

「私の事を想うなら、あなたのことを一番大切にしてください。」

私の一番心に残っている言葉は、緊急事態宣言中に出勤していく母に言われた言葉です。私の母は看護師で、新型コロナの患者を受け入れている病院に勤務していました。そのため、私は、母が出勤することが毎日心配でたまりませんでした。母が仕事に行くときには行ってほしくない気持ちがありました。一方で、人のために命がけて戦う姿が、とてもかっこよく見えました。誇らしい気持ちと、不安で心配な気持ちが入り交じり、私は仕事に行く母に、行かないでとも、行ってらっしゃいとも言えず泣かずに見送るのが精いっぱいでした。そんな時に母にかけてくれたのがこの言葉でした。私は自分の命の重さを知り、世界で一番温かい愛情を受けました。

神奈川県の中2年生の小倉蘭さんがお母さんから掛けられた言葉です。受賞の喜びを以下のように述べています。

「母は、家に残る私と父と小学5年の妹のために、昼も食べられるように多めの食事を準備してくれました。妹は、母を見送る時にすごく泣いてしまうので、励ましました。

以前は、母は出がけに私と妹をハグしてくれましたが、コロナが広がってからは、「危険だから」と気遣ってハグしなくなりました。でも、夜に帰宅した時は笑顔を見せてくれて「愛しているよ」といつてくれます。怒られることもあるけれど、母と一緒にいられるのが幸せと感じます。母の言葉を胸に、消毒をしっかりするなど、自分の命を自分で守ろうと思って生きています。

一番大切に子どもたちのことを考えてくれる母。私も

将来は医療に携わる仕事に就きたいと思います。私の理想は母と一緒に働くことです。」

家族や友達やあなたの身の回りにいる人たち、そこにいるのが当たり前存在、でもきっと掛け替えのない人たちです。自分のことを大切にしようと思ったら、まずは周りの人たちも大切にしてほしい。でもこのコロナ禍のなか、実は自分のことを大切にすることが、他の人のため、周りの人の幸せにつながるということを教えてくれる言葉です。皆さんも自分自身をまずは大切にしてください。

そして、このコンテストの審査委員長を務めた鷺田清一氏が、次のように述べています。

「最近の本からの引用が減ってきているようですね。家族や先輩といった身近な人の言葉が多いですね。身近な人の言葉だと関係が近いので、どうしても自分の行動を再確認する、振り返って反省するようなものになりがちです。

でも、本だと、自分とはまったく異なった時代や状況にいる人の言葉にふれることになるので、思いの振れが大きくなります。

少し背伸びし、普段は読まないような本に挑戦して、未知の世界から届く言葉に反応する、そんな体験してほしいなと思いました。」

昨年4月から朝読書を行っていますが、今後もぜひいろんな本に出合ってください。読書を通して自身の感性を磨き、想像力を養ってください。そして心に残る言葉やセリフがあったなら、メモしてみるのもいいでしょう。

世の中、コロナ禍で大変なことになっていますが、今日話したように、まずは今できることをしっかりやって健康を維持し、自分自身を大切にしましょう。そしてそれぞれが今年度の締めくくりとしての約3ヶ月を悔いのないように生活しましょう。

最後に、本校のホームページに次の投稿がありました。

「1月7日14時頃、郡山駅で野球部の部員さん2名がお年寄りの階段を下るのを手伝っていました。おばあさんの荷物を持ち、歩みの速度を合わせ、寄り添うように階段を

降りてきました。優しい生徒さんだなと感心しました。コロナ禍にあって練習や大会もままならないでしょうが、見ている人はきちんと見ているので、これからも未来に向かって頑張ってください。応援しています。」

2年3組の大平一真君と松本龍哉君の善行です。嬉しい投稿でした。私は常々「神は見ている」という言葉を信じています。皆さんもぜひそういう気持ちを忘れずに行動してほしいと願います。

< 今年の一冊・今年の本編 >

前回は2020年に読んだ本の中から、韓国の「わたしに無害なひと」という作品を紹介しました。今回は映画の番です。自分の中のベスト1ではありませんが、韓国つながりということで、「はちどり」という映画を選びました。1990年代の韓国を舞台に、思春期の少女の揺れ動く思いや家族との関わりを繊細に描いています。「わたしに...」の著者が女性であるように、この作品もキム・ボラ監督が自身の少女時代の体験をもとに作られたとのこと。学校に居場所がない主人公ウニ（14歳）は、家族ともひどく折り合いが悪く、父親は口を開けば文句と説教ばかりで、母親はいつも疲れているのか気がなく、兄がふるう暴力にはじっと耐えるしかない。悩めるウニの心のよりどころとなるのは、ただひとり彼女の話に耳を傾けてくれる塾のヨンジ先生、ところが…というあらすじ。自我に目覚め始めるこの年頃の人間関係があっけなく壊れる様、学歴と世間体を何より優先する社会の理不尽が描かれています。世界で最も小さい鳥のひとつでありながら、その羽を1秒に80回も羽ばたかせ、蜜を求めて長く飛び続けるというはちどりは、希望、愛、生命力の象徴とされます。そのタイトル通り、見終わった後でウニを心から応援したくなりました。高校生必見の一本です！

